

‘Earth’s Shadows’ of Shelley

井 上 初 野

The One remains, the many change and pass ;
 Heaven’s light forever shines, Earth’s shadows fly;
 Life, like a dome of many-coloured glass,
 Stains the white radiance of Eternity,
 Until Death tramples it to fragments.—Die,
 If thou wouldst be with that which thou dost seek!

(*Adonais* LII ll. 460-465)

光の詩人であった Shelley にとって生命そのものは本来単純無垢のものであり白光をもって表わされるにふさわしいものであった。しかしこの単一無雑の生命が俗世の分析的な眼には比類なき錯綜物、恐ろしき影の姿となって映る。Shelley においては光と影は最も多く用いられた *image* であり、*life* と *death* という語は最も多く用いられた言葉であって、光と影、生命と死、又は自由と必然はそれぞれ呼応しており、かくして彼の死生観は光と闇の世界像に表象されているのである。ダンテに倣った Shelley の想像上の宇宙において地球の形造っている円錐形の影は俗世と死滅の総括的な象徴である。‘Earth’s shadows’ (*Adonais* l. 461), ‘the dreary cone of our life’s shade’ (*Epipsychidion* l. 228), ‘the trembling pyramid of night’ (*Hellas* l. 942) は第三天である Venus, 「人の世界の投ぐる影、尖れる端となる処なるこの天」(神曲, 天堂, 第九曲, 118) にまで達している。この地の闇の中に在るのは, ‘an unceasing strife / Of shadows’ (*An Allegory* ll. 4-5)であり、われわれは人生という闇の中を行く夢の影 ‘we the shadows of the dreams’ (*The Sensitive Plant* l. 125) である。

Shelley は *The Cenci* の Dedication To Leigh Hunt で 'Those writings which I have hitherto published, have been little else than visions which impersonate my own appreciations of the beautiful and the just. I can also perceive in them the literary defects incidental to youth and impatience ; they are dreams of what ought to be, or may be. The drama which I now present to you is a sad reality. I lay aside the presumptuous attitude of an instructor, and am content to paint, with such colours as my own heart furnishes, that which has been.' と述べもはや天上の光の中に身をおいてみずから楽しむことはしないで、矛盾を含んだ生命の立場、地球の闇の中に踏みとどまることを宣言している。彼はもはや闇の訪れに葉を閉じる *The Sensitive Plant* ではない。この五幕から成る悲劇こそは不毛な闇の世界への詩人の知的冒険に外ならない。しかもその闇は incest というこの上もなく暗い 'moral deformity'¹⁾ の闇である。Count Cenci の持つ世界は暗い情熱が渦巻き揺れ動いている不毛な砂漠であって、彼は光を恐れひたすら闇に志向する。

Cenci The all-beholding sun yet shines ; I hear
 A busy stir of men about the streets ;
 I see the bright sky through the window-panes :
 It is a garish, broad and peering day ;
 Loud, light, suspicious, full of eyes and ears,
 And every little corner, nook and hole
 Is penetrated with the insolent light.
 Come darkness! Yet, what is the day to me?
 And wherefore should I wish for night, who do
 A deed which shall confound both night and day?

(*The Cenci* Act II Sc. I ll. 174-183)

Count Cenci の持つ闇は地の闇より恐ろしく暗い。(Cenci 'I bear a darker deadlier gloom/Than the earth's shade' Act IV Sc. I ll. 189-190) Cenci

1) Shelley's Preface of *The Cenci*

は人間ではないのだ。われわれの深層心理の奥深くにある罪の闇、あの世界の魂の持つ暗黒からの使者、‘a fiend appointed to chastise / The offences of some unremembered world’ (Act. II Sc. I ll. 162-3) であり、ギリシヤ人が運命と呼んだ闇から送られた ‘a scourge’ (Act IV Sc. I l. 63) である。この残忍な笞は最後の深い傷の中で裂かれその憎悪がすべて加えられるまでゆるめられることはない。(Beatrice. ‘He will not ask it of me till the lash/Be broken in its last and deepest wound; /Until its hate be all inflicted,’ Act IV Sc. I ll. 66-8) 人間の持つ ‘such a scope/For love and hate, despondency and hope’ (*Hymn to Intellectual Beauty* ll. 21-24), 人生の背理的な沈黙を前にして Beatrice は叫ぶ, ‘Horrible things have been in this wide world, /Prodigious mixtures, and confusions strange/Of good and evil;...’ (Act III Sc. I ll. 51-53) ‘I grow weary to behold/The selfish and the strong still tyrannise/Without reproach or check.’¹⁾ と憤る Shelley 少年にとって闇との闘争は Shelley を詩人たらしめた動機であった。主人公 Beatrice の幸福に致命的な闇が incest という異常なものであるが故にこの闇の状況から生ずる葛藤は悲痛である。外見上は Cenci と Beatrice の闘いであるが、内面的には Beatrice の闇によって犯された存在と無垢な本来の姿の葛藤、即ち情熱と情熱の葛藤の上にこの悲劇は成り立っている。Beatrice が汚辱を払って自己を回復しようとする時、彼女の葛藤の完全な緊張は parricide という重大局面へと急騰する。Count Cenci の殺害の予定場所はアペニン山中の巨大な岩の上に立つ Cenci の城への途中である。この城への道は途中で「深い峡谷’ ‘a deep ravine’ (Act III Sc. I l. 245) にそそりたつ「絶壁’ ‘the precipice’ (l. 246) に差ししかかっている。一つの岩が深い恐ろしい淵 (a gulf (l. 250), the dread abyss (l. 254))へ今にもくずれ落ちそうな様でこの絶壁の端を成しており、そこから橋が峡谷を渡っている。Shelley がみずから Preface で表明した ‘the introduction of what is commonly called mere poetry’ を回避して ‘the familiar language of men’ を用いるという文体上の自制を破

1) *The Revolt of Islam*, Dedication IV ll. 33-35

ってこの場所の模様を Beatrice の口を借りて細かく表写しているのは、¹⁾ この絶壁が詩人の内部で築かれつつあった象徴性を付与されているからであると考えられる。暗黒の怖ろしき奈落は「絶望そのもののように巨大にうつろな山々が倦怠から口を開けた」ものである。(‘Huge as despair, as if in weariness, /The melancholy mountains yawns...below’ Act III Sc. I ll. 256-7) 眼下に迫るこの深淵こそは Cenci によって表わされる利己心と権力に対する激しい慾望に満ちた人間という恐るべき存在、人間が自然状態において持っている本性の闇、あの恐ろしい地の影である。この深い狭谷を下に望みつつ落下しないようにと必死に身を支えている絶壁の端を成す岩 (a mighty rock (l. 247), this crag (l. 255)) こそは苦悶し忍耐する Beatrice のみならず、受難の人間像、人間存在の悲劇的状况を象徴している。「想像も出来ない時代より」(from unimaginable years (l. 248)) この状態が続いていると語られる時、人間は歴史的に悲劇的存在である。人間という岩は奈落に半ば身を落しながら恐怖と労役と苦悶 (terror, toil, agony (ll. 249-50)) という性の糧で身を保持し生命の塊 (the mass of life (l. 253)) にすがっている。Prometheus Unbound Act I の scene は ‘A ravine of Icy Rocks in the Indian Caucasus. Prometheus is discovered bound to the Precipice...’ であり、Prometheus の最初の言葉には絶壁である人間の悲劇が痛烈に語られている。

Three thousand years of sleep-unsheltered hours,
And moments aye divided by keen pangs
Till they seemed years, torture and solitude,
Scorn and despair,—they are mine empire :—
More glorious far than that which thou surveyest
From thine unenvied throne, O Mighty God!
Almighty, had I deigned to share the shame
Of thine ill tyranny, and hung not here
Nailed to this wall of eagle-baffling mountain,

1) The Cenci Act III Sc. I ll. 243-265

Black, wintry, dead, unmeasured, without herb,
 Insect, or beast, or shape or sound of life.
 Ah me! alas, pain, pain ever, for ever!

(*Prometheus Unbound* Act I Sc. I ll. 12-23)

Jupiter の投げる闇の中では苦悶と孤独と嘲笑と絶望が人間 Prometheus の帝国を支配するものである。*Prometheus Unbound* で人間の受苦の姿を絶壁に見出していた Shelley の心象風景が *The Cenci* に単に残像として残っているのではなく、一つの象徴として繰り返されていると考えることが出来るであろう。絶壁を成す危巖は民族や人類に共通の苦悶、世界苦と呼ばれるものの象徴である。Beatrice は今にも暗黒の奈落到ち込み飲み込まれそうな不安な岩である。(Andrea ‘…she said : ‘Go tell my father that I see the gulf/Of Hell between us too, which he may pass, I will not,’ Act IV Sc. I ll. 97-99) Cenci 一族は精神状況の末端、絶壁の端まで駆られている。(Giacomo ‘I am driven to the brink,’ Act II Sc. II l. 45, ‘Upon the brink of which you see I stand’ Act III Sc. I l. 338) そして彼等が持っている時間は「足元でぐらぐらしている目も眩むばかりの鋭い狭い時間」(‘the giddy, sharp and narrow hour/Tottering beneath us’ Act V Sc. IV ll. 100-101) である。かくして Cenci という闇の殺害はこの苦悶の完璧な緊張の極みに成される。絶壁を成す岩という imagery がこのように ‘strong feeling, which raises what is low, and levels to the apprehension that which is lofty’¹⁾ である ‘the passion’¹⁾ の ‘the full development and illustration’¹⁾ となり得ている時、Beatrice の語る危巖の風光は叫喚の詩である。

闇の殺害によって Beatrice の Nature が回復されたと思った刹那事態は急転直下 catastrophe に落ち込む。何故なら闇という汚辱を払って自己の本質を回復する行為は parricide という Nature の破壊となるアイロニカルな状況に Beatrice は在るからである。時ならぬ教皇の使者の訪れ、殺害の

1) Shelley’s Preface of *The Cenci*

発覚が時を移さず続く。しかもこの使者は Cenci を捕える者としてやって来て Beatrice を捕えることになるという、又 Cenci の殺害の後に Cenci を捕える者がやってくるといふ運命の irony を含む。parricide によって Beatrice の破壊された無垢な本質, Shelley が ideal prototype と呼ぶ本来の姿は回復されたかのように思われる。少くとも Beatrice 自身はそう信じている。裁判の場面に於ける執拗な自己の無罪潔白への固執も実はこの強い ideal prototype への憧憬に根ざしている。しかし ideal prototype への憧憬, 「星を求める蛾の願い」はこの世界で成就することはない。この憧憬が蒙る虚妄性は既に *The Cenci* 於ける Iago とも言うべき Beatrice の恋人 Orsino の背信に描かれている。Bradley は 'a black necessity, totally regardless alike of human weal and of defference between good and evil or right and wrong.'¹⁾ を 'fate' と呼ばず 'moral order' と呼んでいるが、この 'moral order' は 'poetic justice' に与しない。²⁾ Beatrice はかくして処刑されなければならない。あらゆる憧憬, 希望が無に帰す巨大な絶望に Beatrice は身を委ねる。ここに残ったものは不毛の残滓とも云うべき感情である。われわれは説明の出来ない事実, 絶望的な二律背反に直面させられたまま残り残される。われわれはいぜんとして目も眩むばかりの絶壁上に立往生しているのだ。そしてこれが Bradley の云うように悲劇なのである。(cf. 'We remain confronted with the inexplicable fact, or the no less explicable appearance, of a world travailing for perfection, but bringing to birth, together with glorious good, an evil which it is able to overcome only by self-torture and self-waste. And this fact or appearance is tragedy.'³⁾)

Robert F. Whitman は 'Beatrice's "Pernicious Mistake" In *The Cenci*'⁴⁾ と題する論文で, Shelley の Preface of *The Cenci* から 'Revenge, retaliation, atonement, are pernicious mistakes. If Beatrice had thought in

1) *Shakespearean Tragedy* by A.C. Bradley, p. 22

2) *ibid.* p. 26

3) *ibid.* p. 29

4) PMLA, June. 1959 volume LXXN. Number 3

this manner she would have been wiser and better;’ の主張を引用し、主として裁判の場面の Beatrice の残忍なまでの潔白への固執をとりあげ、Shelley は Beatrice の行為を ‘pernicious mistake’ として描いていると説いている。しかしこれは悲劇の本質を解さない説として論駁されうる。悲劇は Bradley の云うようにわれわれの日常生活上の法的あるいは道徳的観念の領分に属するものではない。¹⁾ Beatrice という悲劇の主人公が善良でなく、parricide が致命的な誤謬であるとしても、彼女の行為がわれわれに人間本性の可能性を感じさせ、アリストテレスのいうようにわれわれの「哀憐と恐怖の情緒のカタルシスを行い」、われわれを満足させるのは何故であろうか。

「いかに個人が、彼の個人的意志と普遍的世界意志との戦の中にあって彼の形式と重心とを獲得するかを示し且つかくして人間行為の本性を明白にすることによってのみ戯曲は活気を帯びるのである。」(フライターク) という真の悲劇性を理解していたからこそ Shelley は Preface を続けて言うのである。‘It is in the restless and anatomizing casuistry with which men seek the justification of Beatrice, yet feel that she has done what needs justification; it is in the superstitious horror with which they contemplate alike her wrong and their revenge, that the dramatic character of what she did and suffered, consists.’

The Cenci という悲劇は Beatrice なる偉大な魂が圧迫され、葛藤煩悶し、遂には破壊される様を描いた。この悲劇の世界ではいたるところで人の考えは行為に移されると逆の方向に向かって進む。自己の Nature を回復したいという希望は行為に移されると Nature を破壊するものとして罰せられ、悲劇の主人公は夢にも思わなかった自己の破滅をその行為の代償として受けるのである。悲劇は irony の世界に成り立っていると云っても過言ではなからう。この異常な悲劇的状况の中で parricide という恐ろしいものが美としてアイロニカルに正当化され得るのは、‘He (= Cenci) has cast Nature off, which was shield, /And Nature casts him off, who is her

1) *Shakespearean Tragedy*, p. 24

shame ;' (Act III Sc. I ll. 286-7) という状態に在るからである。この価値の転換されたところでは美であり無垢であるものが最も残忍になる。Beatrice は兄に parricide を促していう、'Let piety to God,/Brotherly love, justice and clemency,/All things that make tender hardest hearts/Make thine hard, brother.' (Act III Sc. I ll. 387-390) 更に意を翻した刺客に向って 'Ye conscience-stricken craven, rock to rest/Your baby hearts' (Act IV Sc. II ll. 39-40) という時の Beatrice の残酷さは我が胸の乳房をふくんでいる赤子の頭をも砕く Mrs. Macbeth の残酷さに似ている。美であり無垢であるが故に Beatrice は闇の殺害に対して大胆で残忍であり、裁判の場に於いては無罪潔白に対する異常なまでの固執を示す。そして偉大であり美であるものは失われた ideal prototype を回復するためには滅びなければならない。Gilbert Murray に依れば「歴史的には悲劇の主人公は、それをディオニソスと呼ぼうと何と呼ぼうと、要するに『新しい年』のみのりを持って共同体を救うために訪れる『生命の霊』と、わが身に共同体のあらゆる罪を負って、死すべくあるいは荒野に彷徨すべく追放されるパルマコス、つまり身代り山羊に相当するけがれた『古い年』との両方に由来しているらしいのである」¹⁾ が incest と parricide という穢れと罪を負った無垢な魂である Beatrice の「矛盾する性質の奇妙な結合」¹⁾ から悲劇の irony は生れるのであり、アリストテレスのいう「哀憐」と「恐怖」の感情が生ずるのである。このアイロニカルな悲劇の次元にあるものは、二律背反の抱擁とでもいうべきものであろう。善をのみ抱かず悪をも抱く相である。「真に悲劇の特質を成すところのものは、悲劇的葛藤なるものが最初からある神秘の要素——これは究極的には「浄め」と贖罪という古い宗教的観念に遡るものであるが——を内に蔵していることなのである。そうした葛藤は通常の意味におけるよりもさらに深い現実の面で展開されるのであって、したがって普通の意味での成功不成功、正、不正ということではなく、なにかもっと深

1) Gilbert Murray, *The Classical Tradition in Poetry*, London, 1927. III Drama, 松本千秋訳 (世界文学大系 2 ギリシャ, ローマ古典劇集 p. 403)

い価値体系にあてはめて評価されねばならない。そこでは受難が最悪の事態でもなく、また幸福が最上のものでもないのである。」¹⁾ Cenci の殺害という重大な局面に 続いて生じた 反対勢力の没落は Beatrice 等の処刑の形で catastrophe を迎え、けがれた「古い年」は追放され死すのであるが、その過程には「新しい年」のみのりがいたところで暗示されている。parricide によって汚辱を払い ‘that peace/Which sleeps within the core of the heart’s heart;’ (Act V Sc. II ll. 124-125) を回復した Beatrice に安らかな眠りが宿る。(cf. Bernardo ‘How gently slumber rests upon her face, /Like the last thoughts of some day sweetly spent, /Closing in night and dreams, and so prolonged.’ (Act V Sc. III ll. 1-3) 自己回復の正当性、無罪潔白の主張が拒否されることによりこの平安は逆説的に更に深まる。Camillo あるいは Bernardo 等の教皇への嘆願は、それが虚しく終るとしても、一抹の希望を与える。「虚しい希望の光が一瞬暗い闇の舞台を照す」のである。²⁾ この虚りの希望の光を既に越えていた Beatrice は、数々の試練の後に、行動を共にした母、兄に獄中で慰めの歌を、‘some low, sleepy tune,/Not cheerful, nor yet sad, some old dull thing,/Some outworn and unused monotony,/Such as our country gosships sing and spin, /Till they almost forget they live;’ (Act V Sc. II ll. 123-127) を歌うが、それは丁度 Lear と Cordelia の獄中での歌 (cf. Lear. ‘No, no, no, no! Come, let’s away to prison :/We two alone will sing like birds i’ the cage:/When thou dost ask me blessing, I’ll kneel down,/And ask of thee forgiveness: so we’ll live,/And pray, and sing, and tell old tales, and laugh/At gilded butterflies, and hear poor rogues/Talk of court news ;’ *King Lear* Act V Sc. III ll. 8-14) 又縛を解かれた Prometheus が洞窟で「愛」である Asia と共に語り合う話のように (cf. ‘we will sit and talk of time and change,/As the world ebbs and flows, ourselves unchanged.’ *Prometheus Unbound* Act III Sc. III ll. 23-25) 静寂と平安に満ちている。それは「陽気でもないが又悲痛でもない。」何故なら葛藤が

1) *ibid.* p. 410

2) *Shakespearean Tragedy* by A. C. Bradley p. 48

相結ばれ、二律背反が抱擁せられ、死すべき「古い年」とみのりをもたらす「新しい年」が邂逅したこの悲劇の次元では「受難が最悪の事態でもなく、また幸福が最上のものでもないのである」から。チェンチー族の罪と罰の後に唯一人幼い無垢な Bernardo が残る。Cenci の呪詛に予言されているように汚辱の中に残されてはいるが、Beatrice が求めて得られなかった ideal prototype を持ったものとして残るのである。それは Shakespeare の悲劇の大団円の廃虚に残された ‘a family, a city, a country, exhausted, pale and feeble, but alive through the principle of good which animates it.’¹⁾ に似ている。無力ではあるが無垢な Bernardo に「新しい年」が暗示されているといえないだろうか。人生の背理的な沈黙は冷酷であり不動であって Beatrice の Nature の回復は裏切られる。‘I/have met with much injustice in this world ;/No difference has been made by God or man,/Or any power moulding my wretched lot,/“Twixt good or evil, as regard me.’ (Act V Sc. IV ll. 80-4) と述懐する Beatrice に残されたものは、闇に真向からぶつかって深く傷ついた強靱な意志ともいうべき ‘the faith that I, /Through wrapped in a strange cloud of crime and shame, /Lived ever holy and unstained’ (Act V Sc. IV ll. 147-146)のみであるが、彼女が ‘fear and pain/Being subdued. Farewell! Farewell!’ と最後の別を告げる時、この悲劇の持つ異常な恐怖も又慎められ無限の哀憐が満ちわたるのである。「哀憐」は今おぞましい闇に傷ついた深い傷痕から湧く「微笑」に出合ったのだ。

かくしてわれわれはアイロニカルな悲劇の次元で、ある転換が行われ逆説の世界が開けてゆくのを浄化作用の中で感ずる。「身代り山羊が犠牲としてささげられることによって古い年が去り、生命の霊が新しい年にみのりをもたらすという」²⁾ Beatrice が犠牲となって死すことによって、あらゆる闇が去り無垢な生命の曙光が雲間より射し初めるという、即ち死ぬことによ

1) *Shakespearean Tragedy* by A. C. Bradley, p. 26

2) Gilbert Murray, *The Classical Tradition in Poetry* (世界文学大系2ギリシヤ, ローマ古典劇集 松本千秋訳)

ってよみがえるという逆説の世界である。ここでは「恐怖」が「哀憐」に転換される。不可避の破滅の中に復活するという真の悲劇の特質は宗教上の真理でもあるが、Shelley は *The Cenci* の中で Beatrice の受難像をキリストの受難像に重ねてそれを暗示しているように思われる。Beatrice の流す汗と血は ‘the bloody sweat of Christ’ (Act I Sc. I l. 113) であり ‘the blood his master shed’ (Act V Sc. III l. 64) である。‘the most perfect image of God’s love That ever came sorrowing upon the earth’ (Act V Sc. II ll. 66-67) の示唆した ‘Verily, verily, I say unto you, Except a corn of wheat fall into the ground and die, it abideth alone. but if it die, it bringeth forth much fruit. He that loveth his life shall lose it, and he that hateth his life in this world, shall keep it unto life eternal.’ という偉大な逆説がこの血と汗の中に生きてくる。不可避の破滅の中に復活するという主題は *The Cenci* と同年に書かれた *Ode to the West Wind* の中に繰り返されている。陸にあっては木の葉を駆けらし、空にあっては雲の騒乱をひき起し、海にあってはうつつの夢に耽る地中海を揺り動かす嵐のもたらずのは破壊であるが、詩人は尚破壊の中に生命を汲み、西風を ‘Destroyer and preserver’ (l. 14) と呼ぶのである。そして最後に ‘O, Wind,/If Winter comes, can Spring be far behind?’ (ll. 69-70) という有名な象徴的表現に至っている。

The Cenci の preface で Shelley は ‘The person who would treat such a subject must increase the ideal, and diminish the actual horror of the events, so that the pleasure which arises from the poetry which exists in these tempestuous sufferings and crimes may mitigate the pain of the contemplation of the moral deformity from which they spring.’ と述べ嵐の如き苦悩と罪の中に尚詩性を吸んでいる。「神秘力又は自然力との争闘に於ける人間意志の表現」(ブリュヌチエール) である戯曲の形式に従って表現することによって「受難が最悪の事態でもなくまた幸福が最上のものでもない」深い価値体系を更に強く把握した詩人にとって、絶壁の象徴するものは、前にも述べたように、受難の姿であり、闇との絶え間ない葛藤に傷ついた意志の姿であると同時に、アイロニカルで逆説的な価値

体系、即ち悲劇の次元に開けた ‘the mystery of things’¹⁾ の象徴である。人間は暗黒の奈落に半ば身を落し必死に身を支えている絶壁の危巖に象徴される不安な存在であるが、しかし「力強い岩」‘a mighty rock’ (*The Cenci* Act III Sc. I l. 247) であった。Jupiter の投げる呪詛の雪を一步一步踏みしめつつ傷つきながら尚苦痛にうち克ち、自由を失わず光へと志向しつつ ‘the crags of life’ (*Prometheus Unbound* Act III Sc. I l. 15) を登ってゆくのは ‘the soul of man’ (ibid. Act III Sc. I l. 6) である。そして『希望』が無敵だと思ふ苦悶に耐え²⁾ 『希望』がその残骸からそれが瞑想するものを創造するまで希望しつづける³⁾ 時 ‘the slippery, steep / And narrow verge of crag-like agony’ (ibid. Act IV ll. 559–560) から愛が迸り出てすべてを療す。葛藤と苦悩から逆説的に愛が起るのである。強靱な危巖がすがっている ‘the mass of life’ (*The Cenci* Act III Sc. I l. 253) は *Adonais* の最後の stanza で語られている ‘the trembling throng’ (l. 489) であり ‘the massy earth’ (l. 491) であろう。Shelley の魂の舟 ‘my spirit’s bark’ (l. 488) が ‘the trembling throng’ を後にして ‘the massy earth’ と ‘spheréd skies’ (l. 491) の裂かれるところまで舟出してゆくように、Beatrice が ‘the mass of life’ と訣別してこの苦悶の絶壁で救いも解決もなくただ善悪を分別せぬ闇に身を横たえる時、彼女の葛藤と死は Yeats のいう「情熟の儀式」となるといってよいであろう。

ヨブ、オイディプス王、プロメシウス、Beatrice Cenci 等一連の悲劇的主題が Shelley を捕えたのは、人間の存在状況をアイロニカルで逆説的な深い

-
- 1) *King Lear* by Shakespeare, *Lear*, ‘and we’ll talk with them too,/Who loses and who wins ; who’s in, who’s out ;/And take upon us the mystery of things,/As if we were God’s spies ; and we’ll wear out,/In a walled prison, packs and sects of great ones,/That ebb and flow by the moon.’ (Act V Sc. III ll. 14–19)
 - 2) ‘To suffer woes which Hope thinks infinite ;’ (*Prometheus Unbound* Act IV l. 570)
 - 3) ‘to hope till Hope creates/From its own wreck the thing it contemplate’ (ibid. Act IV ll. 573–4)

価値体系の上に行われている悲劇的葛藤として把握する彼の認識に形式を与えたいという要求からであった。1819年が Shelley の *annus mirabilis* といわれるのはただ *Prometheus Unbound*, *The Cenci*, *Ode to the West Wind* 等の大作を世に出したというだけではなく、アイロニカルで逆説的な深い価値体系を象徴する危巖上での自己発見およびこの絶壁上での転換、発展があったからである。1822年6月18日の書簡で Shelley は 'I stand, as it were, upon a precipice, which I have ascended with great, and cannot descend without greater peril, and I am content if the heaven above me is calm for the passing moment.' と述べ自己を絶壁上に見出している。これは irony と逆説を唯一の武器として闇に対して不断の対決を為し孤独な努力によって緊張しつつづけている傷ついた意志を表わす心理的絶壁である。丁度ダンテが「人生の半ばにして正しき道を失えりし我はとある小暗き森の中に我みずからを見出き」という有名な言葉を以って「神曲」を始め自己の立脚点を示しているように、'Me—who am as a nerve o'er which do creep/The else unfelt oppressions of this world' (*Julian and Maddalo* ll. 449-450) である Shelley は最後の作品となった *The Triumph of Life* の立脚点を絶壁上に示し闇の世界への歩みを今一步進めたのであった。ここでは Shelley は「夢物語」という形式を用いて、人生の舞台から色ガラスに染められた極彩色の光を剥脱し、人間自身の持つ非人間性の全貌を、自由と生命の錯覚のもとに生きている人間の怖るべき姿、オイディプス王に象徴される如き明知の姿をとっていた無知の赤裸々な姿を顕にしている。「私は夏の埃が厚く蔽う街道の傍に腰を下ろしていたらしい、夕陽の中の蚋のように無数な人々の、大きな流れが忙しげに動いていた、皆が先を急いでいたが、誰も何処へゆき、何処から来、又何故群集の一人となって夏の遺骸の百万の木葉が空を飛ばされるように、群れ群れて運ばれるのか知らないようであった。」(ll. 41-51) 埃っぽい街路を定めなく駆られる群集の無目的性、無価値、無意味、盲目、無力、混沌、昏迷は 'gnats upon the evening gleam' (l. 46) 及び 'the million leaves of summer's bier' (l. 51) 等影を表わす

直喩によって強調されている。不毛の闇の中で詩人の見出した人生の矛盾と非合理は凱旋する「俗世」の姿に具象化されている。死の恐怖の影に蹲った醜い姿の征服者「俗世」は闇を放って、生命そのものを表わす太陽を嘲笑して放つ馬車のシニカルな冷光を相殺しており、目隠しされた馭者故に前方を駆る馬の速さも殆んど効なく、人生という馬車はまことにまずく馭されている。ここから始まる人間の苦悩と世界の擾乱——死の恐怖、愛の名において行われている狂乱の踊りに揺れ動いる不毛な風景——あらゆる人間の不安の諸相が列挙されている。しかし最も恐るべきは、丁度オイディプス王がテーバイを破滅から救った高潔な人物でありながら最も汚れた人間であったように、凡庸で無害無能の市民のみならず、歴史上の人物、即ち聰明だった人、偉大だった人、名望のあった人、ありとあらゆる人間が「俗世」に征服され囚虜として馬車のまわりに捕われ群がってゆく光景である。「矮人どもさえ足蹴りにする程にこの巨大な世界を、その握力をもって弱少にした」(ll. 226-227) ナポレオンをはじめ、世を征服し皮肉にも俗世に征服された為政者、アレクサンダー大王及び古の偉大な詩人達、哲人プラトン、アリストテレス、又シーザー等の君主達、又「人間と神との間に影の如く立ち、真の太陽をさえ切ってきた」(ll. 289-292) グレゴリー、ジョン等の高僧達すべてこの世界の擾乱と闇を増すことはあってもそれを逃れることは出来ず、死までのひとはしりを地上の劇に身をやつしたのである。プラトン、アリストテレス等による人間の歴史的に長い知的努力も虚しく、あらゆる地上の相貌、地上の行為は夕暮にならないうちに深い闇に捕えられ終息する。「俗世」の放つ冷光は動乱する群集を捕えて触れる者を忽ち醜俗化すると「こよなく逞しい四肢と美しい容貌から、力と新鮮さが塵埃のように落ち、生命の優雅さを持たない行為と形だけを残して」(ll. 520-523)「大群集のひとりひとりが、丁度秋の夕暮、白揚から吹かれ飛ぶ枯葉のように影を放つ。」(ll. 526-529) こうして「丁度どこか印度の小島で熱帯の太陽の輝やきを、吸血蝙蝠の大群が群がり蔽い、夕暮前に、奇怪な夜をもたらすように、森は隔々までも、ものの影に厚く暗がり」(ll. 480-486) この殺戮の風土で、あらゆる光と自由と生命は死

滅する。この不気味な闇の世界は、不毛な戯れと不毛な労役に満ちた不安定で無定形無秩序の混沌、非情な人間の垣塙を表わし、まさにダンテの神曲、地獄篇にも匹敵するであろう。Shelley みずから、それは ‘a wonder worthy of the rhyme/Of him who from the lowest depths of hell,/Through every paradise and through all glory,/Love led serene, and who returned to tell/The words of hate and awe;’ (ll. 471-475) であると表明している如く。ここでは詩人は「権力と善意が私達の生活を如何程背反しつつ支配しているのか、又神は善と善への手段を和解せしめないように作ったのか」(ll. 228-231)と闇の背理的な沈黙を思い深く嘆き「何故私の眼は人々のこの不断の流れにむかつき、私の心情は一つの悲しい想いに嘔気をもようすのか」(ll. 296-300) と絶望しながらも、精神の落下がもたらした苦悩と絶望を慎めようとはせず、矛盾を含んだ地の影にとどまるのである。ただ詩人はこの地上の擾乱について「多くの人達は、草花の生えたことのない道で虚しい骨折りに疲れ、渇きにたえだえになり、泉の音を聞かず微風を感じず、昔ながらの真面目な愚を追うている」(cf. ll. 65-73) と述べ、人間の歴史的に永い努力に対して皮肉な ‘serions folly’ (l. 73) という key-word を残し、あとは一切の解明と説明を省いて、闇の凱旋する幻想を示し、認識の普通の過程を逆にした特別の方法で、無用なものを価値づけ目に見えない存在を夢みる意志が、この暗い深淵から脱却しうる唯一の条件であることを示している。不統一、不安定、無秩序の矛盾撞着に満ちた闇の幻想図こそは、詩人が *Adonais* の中で発した「死せよ。／」という厳命に外ならない。「自己の精神を支配者なる俗世に属し得ず、生命の炎を以って世に処し、鷹のように故郷の真昼の空へ翔け去った少数の聖なる人達」(ll. 128-131) 即ちアテネのソクラテスとイエルサレムのキリストの闇の幻想図に於ける不在は「死せよ。／」という決定的な覚醒を促す配慮のよびかけを暗示している。彼等は危蹟的な逸脱によって地の影を越えたのであった。目には見えない ideal prototype の光を夢みて、世界の背理的な沈黙と不断の対決を為す傷ついた意志の絶壁上で、破壊から逆説的に生命が帰結され、深い闇の中から無数の

光芒が出現する時、不吉の風に運ばれてくる地の闇の気と、人間の葛藤と死が一切を説明するのである。

Waking or asleep,
Thou of death must deem
Things more true and deep
Than we mortals dream,
Or how could thy notes flow in such a chrystal stream?
(*To a Skylark* ll. 81-85)